実践事例①

北海道旭川東高校

自己の成長をデザインできる力を育むため、社会に開かれた学校に

北海道旭川東高校では、生徒が目の前の大学合格だけにとらわれずに、自身の未来を築いていく力を身につけるためには、生徒がもっと社会と接し、自分と社会とのつながりを考えることが必要だと捉えている。その認識の下、生徒と社会をつなぐ様々な取り組みを進めている。その中で、生徒たちは、教師が驚くような発想を発表することもあり、能力を引き出す支援の重要性を、教師は改めて感じている。

社会とのかかわりが、生徒に様々な気づきと学びを生む

北海道旭川東高校は、例年約180人が国公立大学に合格する、地域を代表する進学校だ。進路指導のあり方に「自己の成長をデザインする力の育成」を掲げ、「イメージの自己像〝想〟」と「現実の自己像〝実〟」を広げていき、〝想〟〝実〟がより大きく一致することを目指した指導を行っている（**図1**）。進路指導部長の松井恵一先生は、その思いを次のように語る。

「以前、『就職活動がうまくいかない』と、難関大学に進学した複数の卒業生から言われ、あれだけ指導しても生徒の未来は築けていなかったのかと愕然（がくぜん）としました。大学合格や就職内定はゴールではなく、生徒はその後の未来も自分でつくっていかなければなりません。ならば、私たちは、生徒に自分で成長し続けられる力を育まなければならないと、強く思うようになりました」

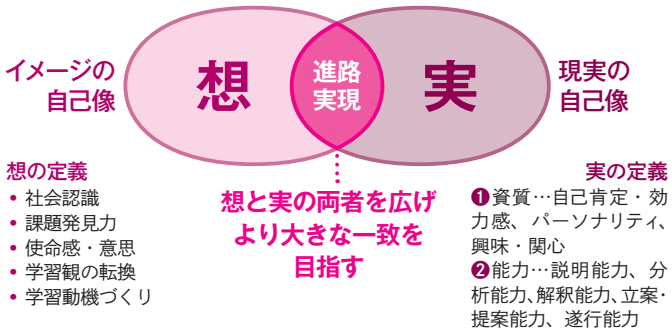
教務部長の尾村晃治先生には、生徒の学ぶ意識を変えさせなければならないと痛感した出来事があった。

「英単語のテストで、プリントの位置で英単語を覚えてきた生徒がいて、テストではその位置が変わっていたために解けなかったということがありました。その生徒に『なぜ、勉強するのか、勉強にどんな意味があると思うか』と尋ねると、『テストのために勉強している』と答えました。それに驚き、生徒が学びの意味や目的を感じられるような指導をもっとしなければならないと思いました」

そのような教師の思いが重なり、進路指導は現行の形となっていった。さらに、松井先生は昨年、地域で開かれたワークショップに参加し、地域の学校への期待を改めて考えたという。

「地域が本校に求めているのは、難関大学や医学部への入学者をより多く

図1　「想実一致の進路デザイン」



＊学校資料を基に編集部で作成

10年後、20年後の社会を見据えた これからの進路指導のあり方

出すことだと思っていました。ところが、地域の人たちと話すと、それだけでなく、旭川を出ても将来は戻ってきてほしい、未来の旭川を考え、地域を支えていってほしいといった願いもあることに気づかされました。しかし、生徒は地域のことをほとんど知りません。生徒と社会をつなぐ場をもっと設けようと思うとともに、それによって、生徒が様々な年代の大人と接することは、自身の生き方を考える場になると考えました」

北海道旭川東高校
松井恵一 まつい・けいいち
教職歴18年。同校に赴任して13年目。進路指導部長。「生徒の可能性を信じ、それを引き出すことに努めたい」

北海道旭川東高校
尾村晃治 おむら・こうじ
教職歴17年。同校に赴任して11年目。教務部長。「生徒を信じることが可能性を伸ばすことになる」

北海道旭川東高校
千葉雄次 ちば・ゆうじ
教職歴22年。同校に赴任して11年目。進路指導部。「個々の生徒が持つ力を最大限に発揮させたい」

北海道旭川東高校
仲俣 薫 なかまた・かおり
教職歴20年。同校に赴任して7年目。進路指導部。「夢に向かって前向きに挑戦する生徒を支援していきたい」

北海道旭川東高校
花尻健明 はなじり・たけあき
教職歴9年。同校に赴任して2年目。進路指導部。「常に前向きに、あたり前のことをあたり前にする」

大学、社会で花開くよう 問題解決型の思考を習慣づける

そうした考えの下、15年度から生徒が社会との接点を持つ新たな取り組みを、授業と課外活動で着手した。

授業での取り組みの1つは、1・2年次の「総合的な学習の時間」で行う「アドミッション・ポリシー研究」だ。大学が求める人物像や大学が担っている社会的責任などを、アドミッション・ポリシーを基に生徒個々で調べた後、グループでの意見交換で考えを深め、最後に自身の目標をもう1度見つめ直す。1年次では、北海道大学、東京大学、京都大学のアドミッション・ポリシーを大学名を伏せて提示し、2年次では、自身の志望大学のうち2校のアドミッション・ポリシーを課題とした。

進路指導部の千葉雄次先生は、取り組みのねらいを次のように語る。

「大学は何のために存在していて、自分はなぜ大学に行くのかを考えてほしいと思って始めました。アドミッション・ポリシーを通して大学の社会的責務や社会のニーズを知ることで、自分と社会とのかかわりにも気づかせるというねらいもあります」

実際、今年度の2年生の活動後には、生徒から「どの大学のアドミッション・ポリシーにも『グローバル』と書いてある。それが、大学や社会で求められる最低条件なのだと分かった」という声が上がったという。

16年度には、新聞記事を活用した、生徒の視野を広げるための取り組みである2年次の「小論情報」の方法を一新した。昨年度までは新聞記事を毎日配布するのみだったが、今年度は、その中から週1回1枚選んでワークシート（**写真1**）に取り組み、現代文の教師に提出する。教師は検印と適宜コメントを添えて返却し、生徒は各自でファイルにとじる。そして、3か月に1回、現代文の授業でファイルを回し読みし、生徒同士でコメントを書く。ワークシートは、記事の要約、問題点と解決案などを小論文

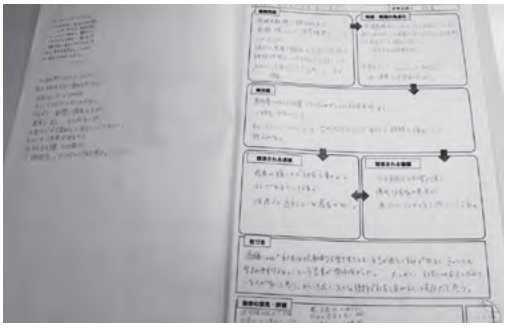


写真1　ワークシートには、「概要把握」「問題・課題の焦点化」「解決案」「想定される成果」「想定される課題」「気づき」の枠を設け、問題解決の枠組みを学べるようにした。「他者の意見・評価」には書き込みが溢れ、裏面に書く生徒もいる。

北海道旭川東高校

◎創立113年の道内有数の進学校。学校標語は「シマレガンバレ」「挙校大和」。2009年度から北海道「地域医療を支える人づくりプロジェクト」の医進類型指定校。3年次に文型・理型・医進類型に分かれる。
◎設立　1903（明治36）年
◎形態　全日制・定時制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約280人
◎2016年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、旭川医科大、北海道大、北海道教育大、東京大、京都大などに192人が合格。私立大は、北海道医療大、北海道薬科大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大、立命館大などに延べ299人が合格。
◎URL　http://www.ah.hokkaido-c.ed.jp

の構想メモのように、段階を追って考えられる形にした。

そのような方法にしたねらいは、多様な分野の新聞記事を読み、また、他者から自分の考えに対する意見をもらい、社会への視野を広げること。そして、時事問題について考え、構想メモを作るという小論文学習の土台を築くこと。さらに、問題解決型の流れで考え、自分の意見を提示するという習慣を身につけることだ。

「1つの解決案で問題がすべて解決するものではなく、また別の問題が出てくるはずであり、それも想定して解決案を考えなければなりません。そうした考え方はすぐに身につくものではなく、学習転移には時間がかかります。ほかの取り組みもそうですが、大学での研究や就職後の仕事でその考え方が必要となった時に、活動の成果が表れると思って、取り組ませています」（千葉先生）

方法を改めて半年。記事の内容に関心があって選んだものの、「記事に関連する知識が少なくて解決案まで書けない」といった生徒の気づきを生んでいる。また、新聞社が異なると、同じニュースでも捉え方が違うことに気づき、「ものの見方が変わった」「家族とニュースについて話す時に、自分も意見を言えるようになった」といった声も上がっている。

最近では、生徒からワークシートの枠組みをなくしてほしいという要望が出た。活動の担当者で、新聞記事を毎日選定している進路指導部の仲俣薫先生は、こう手応えを語る。

「最初は用紙の枠組みに沿っていけば考えやすかったけれども、慣れてくると、『別の流れで考えたい』『ほかの分野と結びつけて考えたい』という欲求が出てきたようです。『他者の意見・評価』の欄も小さく、プリントの裏にまで書く生徒もいます。ワークシートの形式を見直して、生徒が選べるよう数種類用意する予定です」

問題解決と価値創造の両面で探究活動に取り組む

課外活動では、15年度、「旭東アカデメイア」という新たなチャレンジを始めた。10～3月の週1回、放課後に1・2年生の希望者が参加する活動だ。課題や問題を発見し、解決策を探る「問題解決」と、これまでになかった新しい価値を提案していく「価値創造」をテーマに、前半は様々な思考訓練とミニ・プレゼンテーションを行い、後半は生徒が個人またはチームでテーマを設定して探究活動をし、研究発表する。初年度は25人が取り組み、16年度は20人が参加している。本活動を企画・運営する千葉先生は、活動への思いをこう語る。

「社会では『問題解決能力』が重要だと言われますが、新たな価値を創造する側面があってこそ、問題解決に結びつくのではないでしょうか。例えば、ソニーが『ウォークマン』を開発したことで『屋外で個人が音楽を楽しむ』という新たな面白さを生み出しました。生徒にそうした発想力を身につけてほしいと思い、『問題解決』と『価値創造』の両面で探究活動に取り組む場を設けました」

千葉先生が教材を作成し、ファシリテーターも務める。心がけているのは、生徒の内面を揺さぶり、発想を引き出すことだ。今年の第1回では、千葉先生が「自己紹介の定義をみんなで決めて、それに基づいて自己紹介をしよう」と提案。生徒は一瞬驚いたが、すぐに話し合いを始めて、定義を決めていった。1学年担任で進路指導部の花尻健明先生は、生徒の気質に応じた活動だと話す。

「今の生徒は、周りの生徒との話し合いに積極的に取り組みます。アカデメイアの参加者を見ると、人から新しいことを吸収したい、人とつながっていたいという生徒が意外と多いと感じます。生徒の気質を学びに生かすことも大切だと思いました」

松井先生は、活動の手応えを次のように語る。

「昨年、『忘れ物をしないためにはどうすればよいか』を話し合っていた時、ある生徒が『かばんがついてくるようにすればよい』と発言しました。私は最初、意味が理解できなかったのですが、例えば言えば、タブレット端末の登場前に、ここまで手軽に情報を持ち運べるようになることを多くの人が想像できなかったのと同じです。生徒には驚くような力があり、それを発揮できるよう支援することは、とても重要だと感じました」

身近なロールモデルに触れる機会を増やす

今年7月に始めた「学びのフローラ」は、大学生や社会人による講演

会で、既に6回実施した。同校の卒業生でもある花尻先生は、講演者の人選について次のように説明する。

「生徒が将来を考えられるロールモデルとなるよう、この人の生き方にぜひ触れてほしいと感じた卒業生や地域の人に、直接依頼しています。初回は、9年間勤めた会社を辞めて医学部医学科に入学した、私の同級生でした。また、地元の起業家や作業療法士として働きながら論文を書いて大学教員となった卒業生など、様々な人たちに依頼しています」

今後も、生徒の力を引き出していく、多様な活動を行う考えだ。

「例えば、放課後に希望者が集まり、『小論情報』を基に小論文を書いて意見交換をする場を設けたいと考えています。任意の活動は、部活動などで参加が難しい生徒もいます。時間の設定や声かけなどを工夫したいと思います」（仲俣先生）

次代の教育を見据えて活動を先取りし、深化させる

「自己の成長をデザインする力の育成」に向けて、校内での意識統一も図る。13年度には、教師用『進路シラバス』を作成し、進路指導のあり方と3年間の指導の流れ、各活動のねらいと指導のポイントなどを示した（**図2**）。それまで暗黙知として継承されていたが、松井先生が校外研修に参加し、「10年後の自校を考える」「3年間の指導ストーリーをつくる」といったワークショップを体験したことをきっかけに、自校の進路指導を整理して全校に示すことにした。

図2　『進路シラバス』取り組みと育成すべき能力の対応表

		社会認識	課題発見	意思・使命感	自己肯定・効力感	パーソナリティ	興味・関心	説明能力	分析能力	解釈能力	立案・提案能力	遂行能力	学習方略	教科学力
学習群	授業	◎	○	○	○		○	◎	◎	◎			◎	◎
学習群	講習・学習会							◎	◎	◎			◎	◎
学習群	各種模試		○		○			○	○	○			○	◎
行事群	合唱コンクール		○	◎	◎	○		◎		◎	◎	◎		
行事群	学校祭	○	◎		◎	◎	○	○	○	○	◎	◎		

自校の教育活動とそこで育成すべき能力を一覧表にし、共有した。
＊学校資料を基に編集部で作成

「意味のない活動があれば止める機会にもなると考えましたが、進路行事や補習など、どれも目的や時期にきちんとした意味があることが分かりました。模試の回数が多すぎると思っていましたが、改めて見ると、生徒の意識を高めたり、学力の把握に必要だったりと、各時期に実施する意味を再認識できました」（松井先生）

以降、『進路シラバス』は毎年見直し、教師全員に配布している。生徒向けには、『進路シラバス』に手を加えて『旭川東高校で自ら進路をデザインするために』という冊子を配布。大学合格を目的とした内容ではなく、「自分と他者を幸せにするための進路のデザイン」を考えさせる内容とした。また、定期的に進路だよりを発行するとともに、すべての学年集会で、進路に関して必ず進路指導部の教師が情報を発信。全生徒、全教師に同じメッセージが伝わるようにしている。

今後の課題は、次期学習指導要領や高大接続改革を見据え、進み始めた取り組みの指導経験を積み重ねて、改善を図ることだ。

「『小論情報』や『旭東アカデメイア』などは始めたばかりで、目立った成果はありませんが、次の時代の教育に必ず求められる活動だと考えています。世の中の潮流に押されてから始めても、指導経験がないまま行えば、生徒に『やらせる活動』になってしまうでしょう。意識は一遍には変わりません。大学合格だけに向いている意識を、生徒も教師も変えていく、来るべき時に向けてしっかり土台づくりをしていきたいと思います」（松井先生）

もう1つの鍵はカリキュラム・マネジメントだと、尾村先生は語る。

「現在は補習などがあり、生徒が自分のためを考えて使える放課後の時間はそう多くありません。カリキュラム・マネジメントの観点で教育課程を編成することが求められていますが、自己の成長をデザインする力をつけさせるためには、生徒が自己管理できる時間を確保するカリキュラムを検討しなければならないと考えています」